

日本にとってのドイツの魅力—類似とモデル—

星乃治彦

DESK 開設 10 周年おめでとうございます。ここで、私には、日本にとってのドイツの魅力を考えながら、ここでのテーマを「類似とモデル」と題してお話させていただきたいと思います。つまり結論を先に申しますと、日本は、ドイツに近似性を感じながら、同時にドイツをモデルと見なしてきたのではないかと、そして DESK もその上で歴史的教訓を導き出し日本の指針を考えながら、大きな成果を作り出されているのではないかと、ということです。

さて、DESK のホームページでも力説されているのは、やはり日本においてドイツに対する関心が依然として高いということです。ドイツ語が、過去に比べてかなり苦戦しているといわれる現在でも、東京大学教養学部でも 1000 人以上がドイツ語を履修している現状が関心が高い一例です。医学・法学・経済学・教育・歴史学、その他日本のほぼ全ての学問体系の中にドイツの「知」は、しっかり根付いています。アルバイト (Arbeit)、カルテ (Karte) といったドイツ語は、すっかり日本語の一部になっています。

なぜ日本人はこれほどまでにドイツに関心があるのでしょうか。多くの人が、日本人とドイツ人のメンタリティが似ていることをあげるかも知れません。「約束を守る」、「きちんとしている」、清潔好き、順法精神が強い、信頼できる、といったメンタリティが、ドイツ人と日本人は似ているとそこではされます。これらのメンタリティの類似性は、日本人がドイツ人を好きな理由であると同時に、逆に、ドイツ人が日本に関心を寄せる一つの理由ともなっているでしょう。

良いことばかりではありません。批判的精神の弱さを日独に共通したものとして指摘する人もいますし、そこから、日本を「アジアにおけるプロイセン」と批判的に見る人もいます。たしかに、Winckler に言わせれば、英仏に対する Sonderweg (特有な道) としてナチスを生み出したドイツと、後発資本主義国としてアジアを侵略した日本は、悲劇的な歴史をも共有しているのです。

ただ、日本にとってのドイツは似ているだけではありませんでした。ドイツは常に日本にとって手本とすべきモデルでした。日本の近代化にとって、ドイツは大日本帝国憲法のモデルとした国でしたし、ナチにしても当時に日本にとってはモデルでした。例えば、「満蒙生命圏」という用語法は、まさにナチの「生存圏 (Lebensraum)」からの援用でした。

こうしたオイレンブルク使節団の訪日にはじまる日独関係の歴史は、150 年前の 19 世紀半ばに始まります。これと前後したアヘン戦争以降、東アジアは、ウエスタ

ン・インパクトにさらされることになりました。ドイツを含む西欧に対する恐れと憧れを伴いながら、日本は1868年明治維新以降、ヨーロッパ型の近代化にまい進することになったのです。そこでは西欧列強に追いつけ追い越せ、が国家目標となり、天皇を中心とした近代国家作りが始まりました。その際、イギリスに比べて皇帝権が強かったドイツが、日本の近代化のモデルとされたのは当然だったかもしれません。

こうした従来言われてきた、日本がなぜドイツを近代化のモデルとしたのかという理由付けのほかに、ここで私は、あまり注目されていませんが、明治維新の2年後、1870-71年に戦われた普仏戦争でドイツが勝利したということが大きく影響していることを指摘したいと思います。普仏戦争から第1次世界大戦までの、フランス風に言えばベル・エポックの時代は、ドイツの黄金時代でもありましたから、普仏戦争に勝ったドイツが日本の近代化のモデルになったとしても当然だったでしょう。

こうしたドイツに対する *Sehnsucht* は、その後、日本がドイツと第一次大戦で互いに敵として戦ったとしても変わることはありませんでした。ドイツ人を収容した板東俘虜収容所で、ベートーヴェンの *an die Freude* が日本で始めて全曲演奏されたということは有名です。私がおります福岡・久留米の俘虜収容所でも、この時ドイツ人からゴムの製造法がもたらされ、現在のブリジストンの礎石が築かれました。その後、第二次世界大戦を前にして三国同盟を結んでいたナチス・ドイツにしても、その当時の日本人にとっては輝かしく見えたのかも知れません。ここでもドイツは日本にとって、お姉さん、ないしは、お兄さんであったわけでしょう。ただ、ナチスをモデルとした結果は恐ろしいもので、だからこそ、戦後しばらくドイツは日本にとってモデルではなくなったのではないかと考えております。

第二次世界大戦後は、日本にとってもドイツにとっても（正確には西ドイツ）、アメリカが近代化のモデルでした。いかに民主主義を定着化させ、再生するのが、ドイツにとっても、そして日本にとっても課題でした。

しかし、ドイツは同時に冷戦の最前線に位置しており、とくに西ドイツは共産主義に拒否的でしたから、全体主義論が優勢でした。日本のとくに知識人から見れば、この時代の西ドイツは、過去との断絶にしても中途半端に見えましたし、非常事態法や徴兵制施行は、戦後日本の「平和と民主主義」という基本路線からすれば、日本のモデルとはなりませんでした。

戦後ある時点までは、1933年から45年までの歴史を「異常な時代」として切断していたドイツに対して、過去と向かい合っていたのは、むしろ日本の方かも知れません。丸山真男の天皇制分析や、日本では近代的自我の確立が遅れたとする大塚久雄の指摘などは、英仏からの遅れを意識している点では、ドイツで1980年代から盛んになる「特有な道」論と問題意識は重なると考えられます。日本とドイツで類似した問題の立て方です。

ただ、全体としてみるならば戦後しばらくの間、マルクス主義的影響力が強かつ

た日本のアカデミズムの世界では、西ドイツに対してよりも、社会主義に向かっていた東ドイツに対する興味関心のほうが強かったと言えるでしょう。こうして、戦後しばらくは、一般に日本人のドイツへの関心は低く、こうした状況が本格的に変化してくるのは、1980年代だったと言えます。

とくに転換の契機と意識されるようになったのは、1985年戦後40周年にあたってのヴァイツゼッカー大統領の「過去に目を閉じるものは現在にも盲目となる」という、「過去の克服」に対する真摯な姿勢でした。日本とドイツは、第2次世界大戦という類似した過去をもちながらも、この点に関しては、対照的でした。

この点を集中的に研究されたのが、DESKのリーダーである石田さんがやられていた戦争責任研究でした。戦争責任という点でも、図式的に言えば進んだドイツ、遅れた日本と言えるものでした。こうした作業は、単に過去に決着をつけるだけではなく、未来を見据えたものです。反省しない人間は果たして信頼を勝ち取ることができるでしょうか？この点はやはり日本はドイツを見習うべきだと思います。それに日本がドイツに対して遅れているというこの時点での意識は、傲慢さやナショナリズムの暴走を防いでいた、ともいえるでしょう。

たしかに、「1968年」に象徴的なように西ドイツ社会もこの間に大きく変化しました。1970年代ブランドの華々しい東方外交は、緊張緩和政策の先頭を走っていましたし、1980年代に入ると、緑の党に代表される、ドイツの環境問題への取り組みが注目を浴びるようになりました。この間充実した社会福祉や、女性の権利の拡大に対しても、日本人の目が向くようになりました。世代の交代とともに、ドイツはやはり生まれ変わったのだと思います。それとともに、日本にとってのお姉さん、お兄さんとしての輝きをドイツは取り戻したのです。

とくに「過去の克服」は隣国との和解を進める前提です。戦争責任という障害を取り除いて、和解を進めたドイツは、ヨーロッパ統合の中心に上昇していくこととなります。「自由、民主主義」というヨーロッパ的価値を大事にしていたからこそ、1990年のドイツ統一は成し遂げられたとも言えると思います。その後マーストリヒト条約によってヨーロッパ共同体(EG)は、ヨーロッパ連合(EU)へと展開しました。たしかに、先日のギリシア危機が示すように、ヨーロッパ統合も簡単なものでもありません。しかし、大局的にはヨーロッパ統合の方向性だけは、磐石なものに見えます。

それに比べ日本はどうでしょうか。従軍慰安婦問題ははじめ、東アジアの隣人たちとの間で、未だに解決していない問題が山積です。また、今世紀に入って、経済的停滞に起因するフラストレーションは、先日の尖閣列島のような問題を契機に、日本のナショナリズムを刺激し、それがママ排外主義的な形をとることさえあります。こういった点にばかり目が向くと、東アジアの国の間は何んともなくギクシャクしているようにも見えます。

しかし一方では朝鮮半島や中国との交流は拡大し続けています。中国・韓国との

輸出額は、日本の貿易額全体の4割を超えるまでになっていますし、中国との貿易額はアメリカを抜いて一位です。日本を訪れる観光客の3分の2は、中国や韓国からのゲストです。

また、昨年日本で誕生した民主党政権は、色々と問題は抱えつつも、東アジア諸国にあっての評判はそれほど悪いものではありません。例えば、戦後65年周年を迎えての菅首相のメッセージは、国内ではそれほどでもありませんでしたが、海外では概ね歓迎されましたし、ドイツでの評価も良かったと思います。大局的には東アジアとの和解と提携は前進しつつあります。こうした大きな潮流の中にあるのは、例えば尖閣列島の問題にしても、重要な問題ではあっても、全体を左右する問題ではありません。

その意味で東アジアを見る目は一喜一憂するものであってはならず、日本の将来は東アジアの隣人たちとともに歩いていくしかありません。その基本的方向性を確認しながら、その途上で発生するこまごまとした問題を一つ一つ解決していくという姿勢が重要だと考えます。

その上での先例がドイツです。ヨーロッパにおける隣国とともに歩いていこうという姿は、日本のお手本です。ナショナリズムの暴発を押さえ込み、戦争を阻止するためには、東アジア共同体を作っていく以外の道はありません。そしてそれをどうやって作っていくのかは、21世紀東アジアに暮らす私たちの課題です。戦後ドイツのこれまでの経験は、そうした東アジア共同体を構築していく上で、やはり貴重なモデルとなると考えられます。

以上、日本にとってドイツは似ている、だがモデルであった、という歴史と今後の見通しについて述べました。歴史学は現状を反映させる鏡です。だとすれば、以上述べてきましたヨーロッパを志向するドイツをめぐる現状は、どう歴史学の中に反映されてきているのでしょうか。

とくに、EUとか東アジア共同体という、いわば超国家的な広域的な地域に関心を移していくとすれば、実は、「ドイツ」とか「日本」といったこれまでの歴史叙述の枠であった国民国家(Nation State)は相対化されます。こうした国民国家という分析枠組みへの疑念は、ドイツ現代史の分野だけでなく、1980年代以降広く日本の学問領域で盛んです。その試みをいくつか紹介してみましよう。

ドイツが戦後自由と民主主義の体制となったとすれば、果たして、その歴史的源泉をどこに求めるのかという問題が浮上してきます。これまではプロイセンを中心としたドイツ史の叙述が中心でした。プロイセンの軍国主義や非民主的体制を注目され、ドイツの後進性の原因と見なされました。ところが最近の研究は、プロイセン以外にも複数の「ドイツ」が存在することをまず確認します。そして、そこに極めて民主的な伝統がドイツ史の中にも脈々と流れていることを立証していくのです。

例えば、ドイツ農民戦争研究の第一人者である Peter Blickle 教授などは、西南ドイツの共同体に着目し、そこにドイツにおける民主的伝統を見出していこうとする

研究方向をとっています。また別の研究者は、19世紀の産業革命期のザクセンに目をつけ、近代化のザクセン・モデルがあったことを提示します。総じてこうした研究は、非プロイセン的ドイツ統一の可能性を考えさせるものです。

それと並行して、一方ではプロイセンは反動的なだけか、という問いかけは、1980年代の東ドイツから始まったものでした。そこでは、他国に見られないほどの宗教的寛容さがプロイセンにはあったということが明らかになりました。そうだとすれば、ドイツにも民主主義的伝統は様々な形で脈々と存在していたということになり、ドイツ史は、プロイセンを中心とした軍国主義やナチスの歴史ではなく、多元的で民主主義的伝統をもったものと書き換えられることになるでしょう。

また、連邦主義的な伝統はドイツ史の中になかったのか、という問いも発せられています。この点で、逆説的ながら興味深いのは、帝国研究です。例えば、神聖ローマ帝国は存在の影が薄かった帝国でした。ただ、この神聖ローマ帝国を研究していくと、帝国は、一方で領邦を保護しながら、他方では、オスマン・トルコに対抗するなど帝国として共通の課題に取り組んでいたという実態が浮かび上がりました。こうした神聖ローマ帝国を見て、今のドイツの連邦制やEUの原型をなすものという評価を与えても当然でしょう。こうした国民国家という枠を超えた「帝国」という枠の中で、実は多元的な社会が保障されていたということは、オーストリア・ハンガリー帝国の *Ausgleich* 体制の再評価にも見られることであります。

さて、こうした現状の歴史的源泉をさぐる学問的営為とならんで、現在ドイツやEUが直面する問題と格闘する研究者もいます。突きつけられている問題は、アフガニスタン紛争をはじめイスラームとどう付き合っていくかの問題でしょう。歴史によって形成されたいわばヨーロッパ的価値で、ヨーロッパを統合していくことは成功しつつあると言っていいでしょう。では、「ヨーロッパ的価値」に批判的な文化と接触するときはどうすれば良いのでしょうか。これはヨーロッパがグローバル展開していく上では避けて通ることができない問題です。

歴史的に見れば、過去の植民地支配のように、ヨーロッパは異文化を支配・征服していったという歴史をもっています。植民地は今でも大きな傷に苦しんでいるとすれば、2001年のダーバン会議で合意を見た「植民地責任」を問い返すことは必要でしょう。とくにホロコーストという過去をもつドイツの責務は重要です。では、紛争は、どうやって起こるのか、そして最悪の場合、なぜジェノサイドという現象が起こるのか、これはここにおられる石田勇治教授が進めるプロジェクトの課題でもあります。紛争解決の手はずを間違えれば大きな禍根を残すとすれば、やはりこの点での研究の進展は不可欠であると考えます。

以上が、ヨーロッパ統合を学問的にみて、何が課題なのかについてお話をしました。グローバルな観点に立てば、過ちも含めて後発の日本がドイツから学ぶことは依然多いように思えます。とくに、当面は、東アジア共同体を作ろうとするときドイツは一つの模範であることに違いはありません。

その意味でドイツは、日本にとってやはりお姉さん、お兄さんであり続けています。では、果たして、日本という妹ないしは弟はどういった貢献ができるのでしょうか。

実はすでに 1956 年頃、この問いに上原専祿というドイツ中世史研究者は答えていて、アジアが世界に発信できる価値は、「平和と連携」であると言い切っています。たしかに、近代にいたるまで、東アジアの国々も何十年にもわたって戦争するということはありませんでしたし、近世のヨーロッパが数々の宗教戦争を戦っていた時でも、東アジアは比較的平和な時代を迎えていました。ヨーロッパに対して平和の伝統が長いと言えるかも知れません。それに、平和のシンボルとしての「ヒロシマ」と「ナガサキ」は、残念ながらひろくドイツ人の間でも有名です。「平和」は、第二次世界大戦後「平和と民主主義」を守るべき価値として訴えてきた日本人が世界に広めた価値の一つだと思います。

たしかに、近代以来長らく日本からドイツに対する片想いの時期が続きました。ただ、最近ではだいぶ様子が違ってきました。とくに 1980 年代以降ドイツにおいても日本学の進展は目覚ましいものがあります。その後中国への関心がそれに勝っているという現実はあるものの、ドイツ人にとって日本はもはや単にエキゾチックな存在ではなく、グローバルなレベルでの対等な友人です。

そうした日本研究の進展があったからこそ、この DESK の場でも、様々なシンポジウムが可能になったと考えられます。例えば、戦後 60 年を迎えた 2005 年 8 月には、「過去の克服」と集団的記憶—日独比較の視点から— 日独歴史学セミナーが開催されていますし、2009 年 9 月 18 日「明治維新とプロイセン改革—日本とドイツにおける政治的・社会的・文化的変容」と題したシンポジウムが、そして、2010 年 3 月「日独比較研究の可能性—市民社会の観点から—」という国際シンポも開催されています。

こうした比較史的観点から、「類似した」相手を見ながら自己を相対化し、歴史的教訓を引き出していくということは、我々日本側の研究者の問題でもあります。同時にドイツの Japanologie の課題でもあります。その意味で、すでに同じ土俵は設定されています。その土俵としての DESK がこれまで担ってきた課題は、今後ともますます重要となっていっています。つまり、自国のことをまず考え、次にヨーロッパや東アジアのことを考え、そしてグローバルに展開していく、そうした場としての DESK の今後の発展を期待して、私の報告を終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。